

詩篇55篇 一試訳と文献批判

飯

謙

Zusammenfassung

Psalm 55. Übersetzung und Literarkritik

Ken Ii

In der vorliegenden Arbeit lege ich eine literarkritische Analyse von Ps. 55 als Vorarbeitung meines Aufsatzes, "Eine literaturwissenschaftliche und sozialgeschichtliche Erwägung von Ps. 55", *KIRISUTOKYO-KENKYU* (Studien in der christlichen Religion) 53/1(1991), vor. In dieser Arbeit vergleiche ich den erweiterten Literarkritik-Begriff von G. Vanoni, den er in seinem Aufsatz, "Psalm 22. Literarkritik", in; J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung—Psalm 2 und 22*, 1988, S. 153–192, vorgelegt hat. Dieser Terminus "Literarkritik" umfaßt die Bereiche der Textkritik und traditionelle Literarkritik bis her Strukturanalyse. Y. Suzuki benutzt in seinem Buch, *Literarische Studien in Deuteronomium*, 1987, den synonymischen Terminus "Literarisch", der bei ihm einen weiteren Sinn als bei Vanoni hat, bei ihm ist nämlich die Strukturanalyse auf den sozialgeschichtlichen Aspekt bezogen. Der Begriff bei Vanoni hat keine sozialgeschichtliche Perspektive, da seine Aufgabe vom Herausgeber synchronisch begrenzt wird. Ich versuche nun in dieser Arbeit, die umstrittenen Punkte nicht nur synchronisch zu behandeln, sondern auch mit sozialgeschichtlichen Fragestellungen in Zusammenhang zu bringen. Der Aufbau dieser Arbeit ist wie folgt: I. Textliche Probleme, II. Strukturelle Probleme, III. Sprachliche Probleme, IV. Übersetzung.

本稿は筆者が先に発表した詩篇55篇の文献史的研究（注11参照）の前提となったテキストの積義的な分析である。それゆえ両者の間には若干重複箇所があることをお断りし、ご了解をいただきたい。本稿執筆にあたり、最近 Literarkritik という概念を、単に文献の歴史を整理する、いわゆる資料批判としてではなく、本文批判から構造批判まで、文献上の問題を総合的に扱う分野を示すものとして拡張して用いた G. Vanoni の論文を念頭に置いた¹。わが国では鈴木佳秀氏が『申命記の文献学的研究』で構造分析から社会史的考察までをカバーする概念として「文献学」という術語を用いている。残念ながら Vanoni の研究の場合、要求された内容の制約もあり、社会史的なパースペクティブへの広がりにはなかった。しかし本稿では、彼が「文献批判的分析」という表題の下で行なっていたテキスト内の同一あるいは同義の単語および表現の反復と対立の列挙、分析が、社会史的な考察へと展開する問題提起となるよう心がけた。

I. 本文上の諸問題

この項では標記問題に関わる議論を整理、検討しておきたい。われわれは基本的にマソラ本文支持の立場をとり、古代訳や写本等に典拠のない本文改変提案を認めない。

01. 3節 b 'arid : B. Duhm は七十人訳の ἐλπιθήθην に該当するヘブライ語 mrr (悲しむ、嘆く) の一形態をオリジナルと見る。彼によれば、これを写字生が 'āmēr と誤記し、さらに 'rjd と記した。そこで彼は「私は辛く嘆くしかない」と訳す。F. Wutz は同じ七十人訳を参照し、'arid を 'ēra' (√r" 「気が滅入る」) の誤りと見た。そのほか H. Gunkel は Symmachus や Hieronimus とともに 'ūrad (√rdd のホファル形) 「私は踏みにじられた」、H. Herkenne は 'irā (√jr' 「私は恐れる」と読む。M. Dahood はウガリット語 √jrd のアフエル形単数命令形 'ōrēd と読み、「私の嘆きに降り来たりてください」と訳した。彼はしかし1982年の論文で、'rjd を 'r jd ('r は √rh 「積む、集める、つかむ」) の二語に分割して「(不安のうちに) 私の手を握ってください」と訳す、別の提案を行なっている²。これらの修正はコン・テキストにかなっていないとはいえ、古代訳や写本等の典拠に欠けるゆえ、受け入れることはできない。

02. 3節 c 'āhîmā : √hwm のヒッフィール未完了形。BHS の欄外注には読み換えとして、w^eeh^eme^h と w^eehômā の二つが紹介されている。これらは18節の w^ehmh と同根 (√hmh) である。この3節と18節を関係づけようとする試みは正当であると考えるが、本文改変の不可避性については疑念を抱く。F. Delitzsch はすでに、√hwm と √hmh が同一の起源を有するので修正は不要とする見解を提出している。A. Baumann は同様に、上記二語根に √nhm を加えた、語根に hm を含む単語群が「hm という聴覚的・視覚的に不明瞭な混乱を描写する擬声語的な二字語根 zweiradikalige Wurzel」に発する同根語であると説明する³。われわれはこの理解に立った。詩人は2-3節のアクセント音節に長母音 i を配するため、このような希有な形態 (Duhm, S. 150) を用いたと考えられる。(本稿 II-01 参照)

03. 4節 b 'āqat : この語を J. Olshausen は, ša^aqat 「叫び」と読む。Duhm は, 'qt がアラ

ム語の mišš^aqat に由来すると説明し、Gunkel はその mišš^aqat より派生したヘブライ語 mizz^aqat (mz'qt) の短形が 'aqat であると説明する。彼によれば、mz'qt から脱落した語頭の m が、直前の語の mⁿpnj に吸収された。Wutz もヘブライ語の z は j, n, w とともに写字段階で脱落しやすい傾向にあることを指摘し、同様の見解を提示する。他方 Dahood は1979年の論文でこの語を、妨害や障害のある状態を指す √'wq の一人称完了形 'qtī と読み、「(敵の存在のために) 私は動きがとれなかった」⁴ と訳している。

04. 4 節 c jāmtû : A. B. Ehrlich は、七十人訳の ἐξελθων と詩篇21篇12節を参照し、jittû (√n^h「降りる」のヒフフィール形) と読む⁵。彼によれば写字生が二重写記 Dittergraphie を犯して jtj^hw と書き、それを読者が jmt^hw と判読した。R. Kittel と Herkenne (nā'ājû) はこの √n^h を語根とする提案を受け入れている。Dahood は03で触れた論文で、jmt^hw が二重写記ではなく、jam ja^htû (√n^h のヒフフィール形) という語であったと主張し、「彼らは私の上に、災いの海を広げる」と訳す⁶。Gunkel は Symmachus や Hieronimus の訳から、ja'itû (√j^h「飛びかかる」) と読む。しかし23節に √mw^h が用いられていることを考慮し、ここでも √mw^h を語根と解するべきであると考える。

05. 4 節 d jist^hmūnī : Dahood は詩篇38篇21節に従って、jist^hnūnī (√st^h) と読む。

06. 5 節 b 'ēmôt māwet nāp^hlū : 'ēmôt は 'jmh 「恐怖」の複数連用形。Duhm, CA. & EG. Briggs, Kittel, Gunkel らは、これに続く mwt を 'jmw^h の二重写記とみなし、削除する。その理由として Duhm はこれが過剰表現であること、また Briggs はこの表記では詩行が長くなりすぎることをあげる。しかし A. A. Anderson はこの重なりを「最上級」と評し、テキストをそのまま読むよう試みている。実際、この文は文法にもなっており、変更の必要はないと考える。七十人訳で 'jmh, nplw がともに単数で訳されていることは、翻訳上のことであり、ヘブライ語本文に遡るものではない。

07. 6 節 b pallāšūt : 他にはイザヤ書21章4節、エゼキエル書7章18節、ヨブ記21章6節に見られる。F. Hupfeld は、七十人訳、ベシタ、Hieronimus のように šalmāwet と読むよう提案する。Delitzsch は詩篇55篇と同じ動詞を伴うエゼキエル書のテキストを参照し、マソラ・テキストの読みを支持する。F. Baethgen は七十人訳の読みを退け、Symmachus の φοίκη (不安のあまりの戦慄) をあげ、この理解を支持する。

08. 9 節 b mērūaḥ sō'ā missā'ar : ここで問題となることは、9 節 b をどのように読み、またそれをどの詩行に属させるかということである。Hupfeld は注解の第二版で mērūaḥ sō'ā がこのままでは意味が通じないとして、sūpā と読み換えた。Hitzig は、この読み方を「語法の範疇に入らない」と批判する。Hupfeld は第三版では主張を変えて mērūaḥ s'ārā と読み、さらに同義反復 Tautologie を避けるため missā'ar を削除する。Duhm はこの missā'ar を10節につなげた。この読み方は3+2の韻律を守る点からも都合が良く、Gunkel, Herkenne, E. J. Kissane, H. Schmidt, Kraus らに受け入れられた。しかし、Hitzig は、あくまでもマソラ・テキストのまま読むことを主張する。彼によれば、rūaḥ sō'ā が不規則な表現であるため、それに missā'ar を説明句として続ける必要があった。一方、Dahood は、諸家が解釈困難とする sō'ā

を、ウガリット語の š't (sweep) との関連から sweeping wind と訳す。われわれは Hitzig と Dahood の理解に立ち、読み換えの提案を退ける。

09. 10節 a-b balla' 'dōnāj pallag l'sōnām : この節の意味上の不明瞭さとあいまって、このテキストには多くの読み換えが提案されている。この節を9節の missā'ar と結合させた Duhm はこの語を bela' と読む。彼はさらに、'dōnāj が元来詩篇52篇6節、55篇12節に用例のある whwh (w'hawwā) であったと見、それが jhwh と誤記され、最終的に 'dōnāj と読まれるに至ったと説明する。また彼は pallag を peleg と名詞として読み、9節最終行から missā'ar bela' w'hawwā peleg l'sōnām 「滅びと腐敗の(嵐から)、彼らの舌の裂け目の嵐から(私のアジュールへと急ぐ)」と読む。Gunkel と Kraus もこの位置に 'dōnāj が来ることを不可能と考え、詩篇5篇10節を参照しつつ l'sōnām との並行を考慮して、この語を g'lōnām 「彼らの喉」と読み換える。また彼は Duhm にならい、peleg と母音を打ち直す。この意味は √plg I 「運河」から得る。するとこの詩行は「彼らの喉の滅びの嵐から、彼らの唇の急流から」と訳され、意味上の並行法が構成されたかに見える。Dahood は Duhm にならい peleg l'sōnām と読み、これを √bl' 命令形の目的語と解する。しかし Hitzig は balla' と pallag の類音性に着目し、読み換えに否定的な態度をとる。これをもちだすまでもなく、10節 a と b の音韻的並行法は明らかであり(Ⅱの当該箇所参照)、読み換える必要はない。

10. 11節 c-12節 b …b^qqirbā^h …b^qqirbā^h …mēr^hōbā^h : 二つの b^qqirbā^h は11節から12節に続く脚韻を支える機能があると思われるが、12節 a のそれは七十人訳やペシタには欠落している。そこで Baethgen や Kissane はこの語を、意味の連続を妨げるとして本文から削除する。しかしこれらの古代訳が、この反復の意味を正当に認めないまま翻訳にあたって削除したということが、真相ではあるまいか。Duhm はこれを、初めに qirjā あるいは(もしくはそれに続いて) tōkā と書かれた軽率な誤りと見る。第一の提案は Herkenne が受け入れ、第二のそれは Gunkel の見解に反映している。Gunkel はこの箇所を、「ヘブライ語の概念からするとたいへんな文体上の誤り」と評し、二つ目の b^qqirbā^h を b^ttōkā と書き換えるべきであると主張した。A. Weiser と Kraus はこれに従っている。Briggs もこれを写字生の誤りとして、12節 b の brhbbh にならい birhōbā と読み換えている。彼らの見解は、テキスト理解困難の原因を書写上の誤りに求めている。一方、Dahood は句読点を改変し、子音テキストをそのまま読もうと試みている(Ⅲの当該箇所参照)。

11. 13節 a+c lō'-ōjēb j'hār'pēnī…higdīl : Ehrlich は lō' を七十人訳にならって lū と読み、Herkenne, Kissane がこれに従っている。Ehrlich はさらに、√hrp の接頭辞 j を直前の 'ōjēb に組み入れて一人称単数の接尾辞とする。これによって、後行の m'san'ī との間には脚韻が作られ、また √hrp が完了形となるので13節 c の hgdl との時制も整えられる。この提案には Kittel, Gunkel, Herkenne, Kissane, Kraus らが従っている。Dahood はこのようなケースに時制の一致の必要を認めない。われわれは未完了形から完了形への移行を、意志の強まりと解する'。

12. 13節 b w'esšā' : Duhm はこの文が「短すぎる」と述べ、'esā'ehā と接尾辞により目的

語を補った。Kittel はこれに従っている。Baethgen もこれが「文体上、目的語が欠落している」、Kraus もこの詩行の「第二語が落ちている」と指摘している。そこでこの動詞の後に、H. Schmidt は d^obārājw, H. Ringgren は reglī を付け加えた⁸。Gunkel はより大胆に、⁹baqšā mā'ōz 「私は避け所を求めよう」と動詞をも改変する。これら根拠に乏しい提案の一方で、Dahood は接続詞 w が関係詞の機能を担うとして、マソラ・テキストを支持する。

13. 15節 c n^ohallēk b^orāgeš : Duhm や Kraus は15節が「破壊されているに相違ない」と考え、それぞれに改訂の提案を行なっている。Duhm はコンテキストを考慮し、nhlk に代わって jah^olōk, また b^orāgeš を b^orega^o 「一瞬のうちに」と読み換え、「彼が瞬時に消え去るように」Möge er dahingehen im Nu. と訳す。彼はこうすることによって、13-15節を障害なくスムーズに読みうると考えた。しかしこれによっても、改訂を施された15節 c の三人称単数から16節 a の三人称複数への移行が説明できない。そこで Gunkel と Kraus は15節 c の三人称複数で jhlkw b^orā'aš 「彼らが震えつつ……」と読み、16節との接続を円滑にするよう試みた。A. Deissler は最近の注解でこの動詞の改訂を支持している。彼らは15節 c を16節と関係づけるために上記のような改訂を行なったが、彼らの提案によっても13節の単数が16節で複数とされることに不明瞭さが残り、人称移行の問題は決して片づいてはいない。

14. 16節 a jaššī^o māwet : マソラ・テキストの jaššīmāwet を Qere に従い読み換えた。

15. 16節 c kī-rā'ōt bimgūrām b^oqirbām : Duhm は k^orā'ātām m^ogūrīm (√mgr のカル形受動分詞)「彼らの悪のように、(彼らが)撃ち負かされるように」と読み、b^oqirbām は理解困難な bimgūrām を説明する挿入句と見る。Gunkel と Kraus も同様の見解を提示している。Baethgen も b^oqirbām は韻律からはみ出ているため解釈的付加と見なす。Kittel は bimgūrām が kī-māgōr の歪められたものであるとして、この語を削除する。Briggs はこの詩行そのものを後代の挿入とする。Gunkel は kjr'wt を ja'abrū (√'br) と読んで、「彼らとその恐怖へと進み行くように」と訳す。

16. 17節 b wjhwh : Duhm は、詩篇55篇がいわゆるエロヒーム詩篇であることから、この wjhwh を whw' と読み換える。これには Baethgen, Kittel, Gunkel, Kraus, Anderson, Deissler らが同調しているが、改変の必要はないと考える。

17. 17節 b jōšī'ēnī : 七十人訳 (εὐηκουένη μου) はこれを jišmā'ēnī (√šm') と読んでいるが、関心を示す注解者はいない。

18. 18節 c wajjišma' qōlī : Gunkel は18節 c の動詞をマソラ・テキストのような継続形ではなく w^ojšm' と読み、未来形の意にとるように主張している。すでに Duhm, Baethgen, Briggs, Kittel らに同様の考えが見られ、Herkenne は彼に従っている。BHS はケニヨン収集の写本 (MS) やペシタから、w^oašmia' (ヒッフィール形一人称未完了「私は聞かせる」) との読み換えを紹介しているが、顧みる者はない。

19. 19節 a pādā b^ošlōm mapšī : Duhm は前行との時制を整えるため、19節 a を jipdā と読む。Briggs, Kittel, Gunkel, Schmidt, Herkenne がこれに従っている。Dahood は17節, 18節 a-b, 19節 b-c, 20節 a-b, 同 c-d, 21節, 22節 a-b, 同 c-d の韻律がすべて 3+2 である

ことを指摘し、18節c-19節aにもこの韻律を適用する。そこで彼は pdh を pōde^h (贖い主) と分詞形に読み、wajjišma' の主語に据える。次に b^hšālôm をピエール不定詞連用形の b^hšallēm と読み換え、「私の生命(の代価)を支払いつつ」と訳す。彼はウガリット語的な人称代名詞の接尾辞を構想して「私の生命」napši の語尾に次行最初の mqr̄b から語頭の m を編入する。しかしわれわれはマソラ・テキストをそのまま読むよう努める。時制の移行についてはすでに上述したとおり、訴えの深化という観点から説明できよう(注7を参照)。

20. 19節 b miqq^hrāb-lî: この詩行は他と比べて極端に短い。miqq^hrāb は文法的には二通りに解釈される。まず a) 前置詞 m に √qrb 「近づく」の不定詞が結合されたもの。Kittel と Herkenne はそのまま「(敵対者の)私への接近から(神が私を贖った)」と訳す。Kissane は qārēb と分詞形に読み、「私に接近する者から」と訳す。また七十人訳は複数の分詞形に訳していることから、恐らく miqrēbīm lî 「彼らの私への接近から(彼が私を贖った)」と読んだと思われる。Delitzsch は、この語を不定詞として読むべきであり、修辭的には「敵対者が私に近寄ることがないように」との意味であると述べ、Hitzig, Baethgen がこの理解を採用している。次に b) 22節 b との関連から q^hrāb と名詞形に読み、「私の戦いから(神は私を贖った)」と訳す。これは Raschi による読みであり、de Wette, Olshausen, Duhm から最近の Weiser, Anderson, Deissler, 関根に至るまで、幅広い支持を集めている。その他、Gunkel, Schmidt は前置詞 m を削除し、複数の分詞形 q^hrēbīm と読み換えるが、彼らの提案は決定的な根拠をもたない。また Dahood は前項で触れたように mqr̄b から前置詞 m を先行する単語の語尾に付して qārāb と三人称単数完了形とし、「彼(贖い主)は、私に近づく」と訳している。この場合、主語は前行から引き継がれ、文脈は整えられたかに見える。しかし詩篇55篇がウガリット語ではなく、古典ヘブライ語詩文であることを考えるならば、前置詞 m を先行語に移行させることには、やはり無理があると言わざるをえない。

21. 19節 c b^hrabīm: Gunkel と Schmidt は前置詞 b を削除し、rōbīm 「射手たち (rōbe^h=√rbh 「射る」分詞複数形) と読む。したがって前項と合わせ、彼らの修正提案は、アルファベットを一部組み替え ki q^hrēbīm lî rōbīm… 「射手たちが私に近づき (=私を攻め)」となる。Kraus はこのマソラ・テキストが理解不能で破壊されているとし、彼らの提案を受け入れる。対して前置詞 b について Baethgen, Briggs は対象の本質を表現する beth essentiae, Dahood, Anderson は前置詞 b が強調の機能をもつ beth emphaticum であるとし、マソラ・テキストを支持する。しかしこの語を含む詩行の主語が hājū において三人称複数で表現された敵対者であることは明らかであり、b^hrabīm に補語以外の機能を認めるべきではない。

22. 20節 a jišma' 'ēl w^hja^hnēm: Ehrlich はこの個所を、jišma' 'ēl w^hja^hlām と読み換え、全体を「イシュマエルとヤラム(と東の住民たち)」と訳す。これにより、敵対者が東方と南方の民族に特定されることになる。これを Schmidt, Gunkel, Kraus が採用する。だが「ヤラム」w^hlām と読み換える際、w^hlām の n と l が写字段階で誤記されるとは考えにくい。

23. 20節 b w^hjōšēb qedem: この個所について、Olshausen は次のように見る。すなわち、この二語がより長いこの節後半の詩行の始まりを告げるが、残念ながら使用写本の欠損によっ

てその主要部分が失われた。ただ結部に置かれたセラが残った。そこで彼は消滅した後半部を次のように想定する。まず H. Ewald が七十人訳に従って提案したように wjśb のアルファベットを一部入れ替えて冠詞を書き加え (hjwśb), また qdm には前置詞 m を加える。Olshausen はさらにヨブ記36章6節を参照し、「いにしえより座する者は、悪人を生かしてはおかない」 hajōšēb miqqedem lō'-j' hajje^h r'šā'īm という後半部を提案した (S. 238f.)。Delitzsch も wjśb の接続詞 w の扱いに困り、これを前句に付けて w'ja'nēmō jśb qdm とし、これを元来のテキストと想定する。Hitzig も Delitzsch の改訂が高い可能性をもつと評価する。彼は、形態の点で、16節 a の 'ljmw が有力な材料を提供すると述べる。Duhm は全体としてこれを受け入れるが、七十人訳を参照して、動詞をピエール形で w'annēmō jōšēb … と読み、Baethgen, Briggs, Kittel, Herkenne, Kissane らがこれに従っている。Dahood は wjśb qdm を後続文の主語と見る。いずれにせよ、wjśb の接続詞 w が、解釈上の大きな妨げとなっていることは間違いない。

24. 20節 b selā : Ehrlich はこれを kullō^h と読み換えて「(東方の住民も) みな」と訳し、Gunkel, Kraus がこれに従っている。Kraus はその理由として、この Bikola に先行する18節 c - 19節 a と19節 b-c の韻律が 2+3 であることをあげる。

25. 20節 c ḥ'lipōt : ḥ'lipā (√ḥlp) の複数形。語根の基本的な意味は「次々に続く、取り替える、代理する」である。Kissane はこの語に先行する 'ēn を 'āwen と読み換え、「彼らはそのうちで、悪の上に悪を次々と犯す」と訳す。Duhm は箴言31章27節を参照し、これを ḥ'likōt と読み換える。これは基本的に「道」という意味であるが、彼は「しきたり」と訳す。

26. 21節 a bišlōmājw : Baethgen はここが複数形容詞形で書かれているので、詩篇7篇5節に従って分詞形 b'šōl'mājw に書き換えるよう提案する。Kittel, Gunkel, Herkenne, Kissane がこれに従う。他方、Briggs はこの語を詩人に関係づけるため単数がふさわしいと考え、šōl'mō と読む。Schmidt がこれを受け入れる。Dahood はマソラ・テキストのまま読む。彼によれば、これは意志の強さを表わす複数であり、単数で訳しても差し支えない。

27. 21節 a jādājw : Ehrlich はいくつかの写本と七十人訳, Aquila, Symmachus を参照し、これを jādō と単数に読む。Gunkel がこれに従う。

28. 22節 a ḥāl'qū maḥmā'ōt pīw : √ḥlq は多くの場合 I 「なめらか (である)」と訳されるが、七十人訳は II 「分ける」をとる。さらに maḥmā'ōt を mēḥmā'ōt (前置詞 m と √ḥm' の連用形), また pīw を pnjw (顔つき) と読み換え、全体を「彼らはこの顔の怒りによってバラバラにされ」と訳す。しかし21節 a-b との音韻的並行法 (II の当該箇所を参照) から見て、pnjw の改変を認めることはできない。タルグム, Symmachus, Hieronimus は22節 c-d との並行を意識して、mēḥmā'ōt と比較級の読みを示している。しかし Olshausen は, ḥāl'qū が元来 maḥmā'ōt と単数であったと見るものの、現在のマソラ・テキストを支持し、改変には批判的立場をとる。Delitzsch も mēḥmā'ōt という複数連用形 (Gesenius の Lexicon による) の読みが「その口」pnjw を √ḥlp の主語に据えることを不可能にするとの理由で、この改変を退ける。しかし Duhm は単複の問題を解消するために、Olshausen の仮説に従って ḥlq mēḥem'ā

と読み換えて比較級と解し、22節 c-d との並行関係を明確にする。Briggs, Kittel, Schmidt, Gunkel, Herkenne, Kissane らはこの理解に立つ。われわれは Delitzsch の見解を受け入れた。

29. 22節 b $\dot{u}q^{\circ}r\dot{a}b-libb\dot{o}$: 原文は試訳のようにしか訳せない。しかし lbw に前置詞 b を補い、「その心には戦い」との訳がすでに Briggs, Schmidt に見られる。Kissane はこの本文批判を明記している。Kraus, 関根は特に注意書きはないが、この理解に立つ。Dahood は注解の1979年版でこれを $\dot{u}q^{\circ}r\dot{f} b^{\circ}libb\dot{o}$ 「敵意がその心に」とする改変提案を行なっている。彼の考えでは wqrb 最後の b が位置を換え、lbw の前置詞となる。

30. 23節 a $has\dot{l}ek j^{\circ}hobk\dot{a} l-jwhw$: Dahood は母音の改変を提案している。まず彼は $h\dot{s}lk$ を $\check{v}\dot{s}lk$ I 「捨てる」のヒフフィール命令形ではなく、同 II 「供給する」の分詞形 $has\dot{s}olek$ と読む。彼の考えでは、 $has\dot{s}olek$ 冒頭の冠詞 ha は二人称の接頭辞である。そして $l-jwhw$ は混成の神名で、「至高のヤハウエ」を意味する。さらに $jhb\dot{k}$ を $\check{v}jhb$ のカル分詞形 $j\dot{o}h\dot{e}b^{\circ}k\dot{a}$ 「君を恵む者」(IIIの当該箇所参照)と読み、23節 b の主語に据える。そうして「君の備えをする者は至高のヤハウエ。君を支える、君を恵む者」と訳す。しかし例えば $l-jwhw$ は $h\dot{s}lk$ の目的語とすることが一番理にかなっており、彼の提案を受け入れることはできない。

31. 23節 d $m\dot{o}t la\dot{s}šadd\dot{a}q$: Baethgen は詩篇66篇9節に従って $lamm\dot{o}t \dot{s}add\dot{a}q$ と読み換え、Gunkel がこれを受け入れている。さらに Herkenne, Kraus も断り書きのないままこの本文批判に準じている。しかしマソラ・テキストのままでは意味はとれるので、改変の必要はない。

32. 24節 b $lib^{\circ}er \dot{s}a\dot{h}at$: Baethgen はこの同義語を並べた表現を奇異に思い、 $b^{\circ}r$ は元来 $b\dot{o}r$ 「灰汁」であったが、写字生の誤記で現在のように書かれたと考えた。彼よりも前に Hupfeld, また後には Kissane も同様の見解を提示している。しかし Gunkel は旧約中で同義語を重ねる技法は珍しいものではなく(たとえば詩132: 5, 箴8: 31, エゼ36: 3), この同義語の結合が「冥界」*Unterwelt* を表わすとし、改変の必要を認めない。

33. 24節 e $Duhm$ は、最終行が本来 *Bikola* であったのに一行脱落して *Kolon* となったと見、ヤハウエへの呼びかけを付した七十人訳を参照して、「ヤハウエ、わが神よ」という詩行を挿入する。Kittel はこれを支持するが、Briggs は疑念視している。逆に Herkenne は24節 e そのものが56篇4節の欄外異文 *Randvariante* であったとして、削除する。

II. 構造上の諸問題

01. 2節以下: 各語のアクセント音節, あるいは節頭および節末語に長母音 \dot{i} が頻出する(下線部=アクセント音節。波線=非アクセント音節の \dot{i})。

2a-b: $hi^{\circ}z\dot{a}n\dot{a} \text{ } ^{\circ}l\dot{o}h\dot{a}m \text{ } t^{\circ}pill\dot{a}t\dot{i} \parallel w^{\circ}l-tt^{\circ}lm \text{ } mitt^{\circ}hinn\dot{a}n\dot{i}$.

3a-c: $hiq\dot{s}\dot{t}b\dot{a} \quad \underline{\dot{l}\dot{i}} \text{ } wa^{\circ}n\dot{e}n\dot{i} \parallel ^{\circ}ar\dot{f}d \text{ } b^{\circ}\dot{s}\dot{i}h\dot{i} \text{ } w^{\circ}ah\dot{a}m\dot{a}$.

4c-d: $ki^{\circ}j\dot{a}m\dot{i}t\dot{u} \quad ^{\circ}lj \quad ^{\circ}wn \parallel wb^{\circ}p \quad ji\dot{s}t^{\circ}m\dot{u}n\dot{i}$.

5a : $\underline{\dot{l}ib\dot{i}} \text{ } j\dot{a}h\dot{i}l \quad b^{\circ}qirb\dot{i}$.

筆者はこれまですでにいくつかの論稿でヘブライ語詩文テキストにおける長母音 \dot{i} の連続と「悲痛な感情」との結びつきを指摘してきた⁹。この \dot{i} の連続をオリジナル・テキストの指標と

解することも可能であるとする。この関連で、下に示すように10節 c-d にも ḥms (暴虐) を中心とする、アクセント音節の母音 *i* が構成するインクルージオを確認できる。ここから10節 c-d が初期テキストで4節 c-d と対応関係にあったことが想定される(下記03参照)。

10c-d : kī-rā'itī ḥms w°rīb b°īr.

02. 3節, 18節 √*šjh*+√*hm*: これらの二語が、それぞれ活用は異なるものの、隔てられた位置で同時に反復されている(√*hm* の語根についての議論は I の当該箇所を参照せよ)。

3b-c : 'ārīd b°šihī w°āhīmā.

18b : 'āsīḥā w°eh°me^h

形態を観察すると、3節 b では01に言及したように、作者が音韻律を意識してアクセント音節に母音 *i* を連続させたため、*āhīmā* という√*hm* の不規則な形態が用いられた。一方、18節にはこの音韻律はない。作者が3節との間の結束性を構築するためにこれらの語を用いたと考えることが自然であろう。これら両節の間には、「嘆き」と「嘆きの克服」という二項対立を認めることができる。

03. 3節 c+4節 c, 9+10節 c: 双方には次のような音韻的並行法が確認される。

3c+4c : 'āhīmā miqōl 'ōjēb | mip°nē 'āqat rāsā' || kī……jišt°mūnī.

9+10c : 'āhīśā miplāt lī | mērūah sō'ā missā'ar || kī…… b°īr.

まず双方の冒頭の語は、それぞれ明らかな類音で構成されている。その後、二つの前置詞 *m* をはさみ、行末のアクセント音節には、やはり類音 *sā*'/*sā*' が置かれている。後続詩行は双方とも因由文を導入する *kī* に始まり、最終音節はいずれも長母音 *i* である。このことは、これらの詩行が、初期段階のテキストにおいて対応する位置関係にあったことを想像させる。

04. 4節 c, 23節 d √*mwṭ* (揺らぐ): 両個所に√*mwṭ* の派生語が記されている。

4c : kī-jāmītū 'lj 'wn

23d : (l'-jtn l'lm) mōṭ lšdjq

√*mwṭ* が鍵語となって、詩人を動揺させる敵対者(4節)と詩人を動揺から守る神の姿が対照されている。

05. 5節 a, 11節 c, 12節 a, 19節 b, 22節 b : √*qrb* が使用されている。

5a : lbj jḥjl bqrbj.

11c : w'wn w'ml bqrbh.

12a : hwwt bqrbh.

16c : kj-r'wt bmgwrm bqrbm.

19b : mqrb-lj.

22b : wqrb-lbw.

これらのうちのいくつかは、初期段階のテキストにおいて対応する位置関係にあったことが想定される。

06. 5節 a+b, 13節 a+c, 18節 c+19節 a: これら三つの個所では並行法内部で、動詞時制が未完了形から完了形へと移行している。

5a+b : jhjl→nplw

13a+c : jhrpnj→hgdjl

18c+19a : wjśm'→pdh

管見では、この移行は過去・未来の時間に関わるものではなく、訴えの深化、先鋭化を示すヘブライ語詩文の表現法と解されるべきである（注7を参照）。

07. 5節 b, 16節 a √mwt (死) : 兩個所でこの語が用いられている。

5a : 死の恐怖が、私の上に落ちてきた。

16a : 死が彼らを、誤襲するように。

死が襲う対象が、詩人から敵対者へと移行する。

08. 6節 a, 12節 b-c : 双方の詩行では、主語と動詞の人称が食い違っている。すなわち主語は二つの同義語を重ねた複数形であるのに対して、それを受ける動詞は単数である。

6a : jr'h wr'd jb' bj.

12b-c : l'-jmjś mrḥbh tk wmrmh.

これに対しては本文改変の提案や二詞一意と見る見解などが提出されているが（I, IIIの当該箇所および注25を参照）、人称のねじれによる異化効果を狙った文学的な手法と解するべきであろう。これらの二詩行は、上述の03と同じく、初期段階のテキストにおいて対応する位置にあったことが想定される。

09. 10節 a, b : 以下のような音韻的並行法が認められる。

10a : balla' 'dōnāj.

10b : pallag l'šōnām.

この構造は10節が一つのユニットとして書かれていることを示し、テキスト改変や句のまたがり（Enjanbement）の提案を退ける根拠となる（Iの該当箇所を参照）。

10. 11節 a-12節 c : 行末に類似する脚韻が指摘される。

11a : jwmm wjlh j'sōb'buḥā

11b : 'l-hōmōtejhā

11c : w'wn w'ml b'qirbā^h

12a : hwwt b'qirbā^h

12b : lō'-jmjś mēr'ḥōbā^h

12c : tōk ūmirmā

12節 b-c は音韻的並行法を構成している。そして12節 b の行末脚韻は明らかに11節 c-12節 a をエコーさせているが、しかしそれは12節 c でデフォルメされる。小段落の終結を示すサインと解しうる。

11. 12節 c, 24節 c mrmh : この語は二つの個所で接続詞 w を伴って用いられている。

12c : twk wmrmh

24c : 'nšj dmjm wmrmh

12節 c では twk と並列されているが、この組み合わせはエレミヤ書9章5節、詩篇10篇7

節に見られる。24節の dmjm と並列された組み合わせは、やはり詩篇 5 篇 7 節で用いられている。双方とも、他者の生を抑圧する、神の意志に反する者の形容表現として慣用的な性格を有すると思われ、この詩篇における構造上の機能は特に認められない。

12. 16節 b, 24節 a-b+c-d: 明らかな同義性が指摘される。

16b : jrđw s'wl hajjm = 彼らが下るように、陰府へ、生きたまま。

24a-b: … trdm lb'r šht = あなたが彼らを下らせるように、底なしの穴へ。

24c-d: … l'-jḥšw jmjhm jmjhm = 彼らはその日々の半分も得ることはできない。

24節 a-d は16節 b の言い換えである。同じ動詞 (√jrd) および同内容の方向を示す対格とが用いられている。そして16節 b の「生きたまま」と24節 d は同義と考えてよい。これはいずれも敵対者が報復を受けるよう詩人が願う文脈に見られ、悪人の受けるべき報いに関する当時の一般的な認識が記されている¹⁰。しかしそれぞれの主語は、敵対者 (16節)、神 (24節) と区別されている。さらに16節 a には、詩人の願望として、「死が彼らを誤襲するように」という記述が見られる。それゆえ16節の動作主は「死」と解せるが、24節ではそれが神へと移行する。詩人が神の介入を願う点にテキスト上の進展が観察される。

13. 17節 a-b, 18節 a-19節 a: 17節 a の内容が18節 a-b で、17節 b の内容が18節 c-19節 a で反復、拡張されている。この構造において18節 c は、詩人の訴えと救済をつなぐ要因を示す詩行として機能している。

17a: 私は神に呼ばれる。 →18a-b: 夕に……私は吐き、思い乱れる。

17b: ヤ、ウエが私を救う。 →18c: 彼は、私の声を、聞いた。

19a: 彼は贖った、私の魂を、平安のうちに。

14. 17節 a, 18節 b: アレフによる頭韻が観察される。

17a, 18b: 'nj 'l-'lhjm 'qr'. …… 'šjḥh w'hmh.

上記13との関連で考察すると、アレフの頭韻をもつ詩行は嘆きの内容を含んでいる。

15. 18節 c-19節 a, 19節 b-c: 双方のテキストに以下のような音韻的並行法が認められる。

18c-19a: wajjišma' qôlî || pādā b'šālôm napšî.

19b-19c: miqq'rāb-lî || kî-b'rabîm hajû 'immađî.

詩人は各詩行の終結部に同じ長母音 î を脚韻として置かれている。この構造は、詩人の体験した神による贖い (√pdh) が、具体的には敵対者からの解放であったとの印象を与える。

16. 18節 c, 20節 a √šm': 並行法が同一主語 (神) 同一動詞によって書き出されている。

18c-19a: wjšm' qwlj || pdh bšlwn npšj.

20a-b : jšm' 'l || wj'nm wjšb qdm.

しかしそれぞれの後読詩行を見ると、19節 a では自身の魂 npšj の救済が語られているのに対し、20節 b では神による敵対者の処罰への願いに移行する。この構造においては、敵対者への神による処罰が詩人の救いの問題と関係づけられている。

17. 21節 a-b, 22節 a-b: 以下のように、終結部分に音韻的並行が認められる。

21a-b: šlḥ jdjw bšlmjw || ḥll b'rittô

22a-b : ḥlqw mḥm't p̄jw || wqrb-libō

22c-d : rkw dbriw mšmn || whmhy ptibōt

この構造では、敵対者表象が20節まで続いてきた三人称複数から三人称単数に移行し、それが詩行末尾で強調されている。しかし22節c-dにおいてその音韻的な構造は部分的に受け継がれつつデフォルメされ、小段落の境界が暗示される。

18. 神名の使用：この詩篇では四種の神名がみられる。

'lhjm : 2a, 17a, 20d, 24a

jhwh : 17b, 23a

'l : 20a

'dnj : 10a

詩篇55篇は、いわゆるエロヒーム詩篇（詩42-83篇）に属するが、'lhjmを機械的にjhwhと読み換えるべきではなく、編集問題の領域で検討するべきであると考えられる。

19. 敵対者表象：この詩篇には、単複両形の敵対者表象が見られる。

単数 : 4a-b, 13-15, 21-22

複数 : 4c-d, 10b, 11a-b, 16, 19c, 20b-d, 24a-d

詩篇においてこのような単複混合の敵対者描写は少なからず見られる。単数形の場合、多くは集合名詞的な性格が強い¹¹。本詩篇においては単数表記のうち、4節a-bの'wjbとrš'は、敵対者を具体的に特定する13-15節と21-22節の叙述とは異なる、一般的な集合名詞的響きを感得できる。この表象法も、編集層の問題として取り上げる必要がある。

20. 11節a, 13節b, 19節b: これらの詩行は1アクセントで構成されており、本文批判的な改変やテキストの組み替えが提案されている（I, IIIの当該個所を参照）。しかし上に指摘した音韻的並行法や構造上の意味作用による考察を行なう必要がある。

III. 文献批判的考察——言語・文法上の諸問題

01. 1節 lamnaššēah: 詩篇に55回、ハバクク書に1回（3:19）見られる。この語の理解について、定説とよびうる決定的な見解はまだなく、今日も議論が続いている¹²。すでに古代訳においても、タルグムの「讚美に」l'sabbahia', 七十人訳の終末論的な響きをもつ「成就まで」あるいは「終わりまで」εἰς τὸ τέλος, をはじめ、Theodotionの「勝利まで」εἰς τὸ νίκος, Symmachusの「勝利の歌」ἐπινίκος, Aquilaの「勝者のために」τῷ νικοπῶなどの諸訳からうかがえるように、その論議が始まっていたといえよう。G. W. Andersonによると、その語根√nšhは、1) 輝く、2) 傑出する、3) 勝つ、4) 継続する、5) 監督する、を意味する。基本概念として4)を指摘する者もあるが、多くは1)をあげている¹³。タルグムの訳語はこのアラム語が「傑出する」「勝つ」とともに「ほめたたえる」を意味すること、また七十人訳の訳語は、lmnšhが「永遠性」を意味するlanēšahの同義語と見られたことに根拠をおく。しかし√nšhが動詞的に用いられる場合¹⁴、常に5)の意味に基づいており、ここから「聖歌隊の指揮者」を意味する伝統的な訳が生まれた。lmnšhが、L. Delekatが指摘したようなダビデの栄光の名

として解釈、あるいは N. Füglistner が論じたような七十人訳から可能となる終末論的・メシヤ論的な解釈への道を後に開くとしても¹⁵、ここに取り上げた表記は、元来演奏上の指示であったと思われ、これが作品解釈を方向づけると考えるべきではない。そこから 5) の理解に基づく訳語が妥当であると考え。ただし邦訳において定着している「指揮者」は、近代音楽における指揮者 (Dirigent) をイメージさせるが、「堅琴を奏でて指揮した nšh」(歴代上15:21) という記事が示すように、古代イスラエルに Dirigent 的な意味での指揮者が存在した形跡は、当然のことながらなく、別の訳語が望ましいと考える。

02. 1 節 maškil: 最近 K. Koenen はこの語につき興味深い提案をしている。それは「マスキール」が元来「交唱」の表わす記号であったというものである¹⁶。従来の「マスキール」解釈は、その語根を $\sqrt{\text{skl}}$ I のヒフフィール形 (①分別, 洞察力がある, ②理解させる, ③成功している) と見ることに出発点を置いた。①の意味に立つ場合、これを高い芸術性をもつ Kunstlied と解し、自然を越えて啓示された知識をもってうたわれた作品とする説明が施される¹⁷。②の理解に立つ場合、マスキールは知恵の詩篇に関係づけられる¹⁸。しかし Koenen は、この表題をもつ「嘆きのうた」や「感謝のうた」「結婚歌」は、教育的意図をもたないと思われ、この方向からでは十分に説明できないと反論する。③の理解に立つ Delekat は、この語を当時の「流行歌」という意味で、成功した歌を示すとした¹⁹。Koenen は、これが当時の礼拝でよくうたわれた歌ということで「成功した」という表現を使えるかもしれないが、しかし詩篇中に13あるマスキールが、他の詩篇をさしおいてもっとも愛されていたとする根拠は何もないとこれを退ける。そこで彼は、この語根として $\sqrt{\text{skl}}$ II 「絡み合わせる」verflechten, 「交差させる」überkreuzen が想定されるべきであると主張する。この用例は創世記48章14節 b に見られるが、彼はこの語の意味を、タルグム・ヨナタン、七十人訳、ヴルガタ、ペシタ ($\sqrt{\text{hlp}}$ の šafel 形) で確認し、シリア語にはこの動詞を用いた「交唱」šwḥlpy ql' (Wechselgesang) という表現があることを紹介する。彼はシリア語の šafel 形もヘブライ語のヒフフィール形も使役の意味をもつことから、ヘブライ語の $\sqrt{\text{skl}}$ II のヒフフィール形がシリア語の $\sqrt{\text{hlp}}$ の šafel 形に対応し、詩篇の「マスキール」という表題が、シリア語の šwḥlpy ql' に該当すると結論づける。そして彼によれば、マスキールの詩篇に見られる、ヤハウェを異なる人称 (二人称と三人称) で歌う個所は、異なる歌い手の存在を物語る (しかしそのような人称の交替は「マスキール歌集」のみに見られるわけではない)。また詩篇136篇のように、明らかに交唱と思われる作品は他にもある。さらに Koenen 自身も言及しているように、相互に非常によく似ている詩篇53篇と14篇についても、なぜ前者のみが交唱で歌われるのか釈然としない。無論、彼の仮説は、そこから作品が個別に詩篇 Psalter に採用されていった「交唱歌集」の存在を想定しただけのことで、他に「交唱」詩が存在することや同じ作品が独唱など他の形式で歌われることは少しも不思議ではないと説明できるかもしれない。しかし詩篇78篇のような、語り手が一人称で話だして歴史を聞かせる形式をとる作品が「交唱」であったと考えることはやはり難しい。筆者はここでマスキールについて結論づけることはできないが、Koenen の批判にもかかわらず、詩篇78篇に代表されるような、教化を目して創作された作品集、すなわち②の理解に立つこと

がもっとも理にかなっていると思われる。

03. 3節 b šihî: K. Seybold は, ših がしばしば知恵の詩と個人の嘆きのうたに見られることを指摘し, 知恵の詩においては擬声語的な「呟く」という意味に解すべきであると提案する²⁰。しかしこれは嘆きの歌にも該当する。われわれのテキストでは前置詞 b に ših が接続されているため, 「……つつ」と分詞的に訳した。

04. 3節 b 'arîd: この語根と意味はなお不明で, 議論されている。多くの研究者はこの語を √rwd のヒッフィール形と見る。この語の用例は他に3つある(エレ2: 31=カル完了形, ホセ12: 1=カル分詞形, 創27: 40=ヒッフィール未完了形)。Baethgen は, この語がアラビア語で「(群れから) 離れてさまよう」家畜を意味するが, エレミヤ書やホセア書(すなわちカル形)では「ヤハウェから離れてその道をさまよう」民にあてられている, ことを指摘する。さらに Delitzsch はこの語が創世記27章40節で「放浪の人生」ein Tummelleben を表わしていることから, 詩篇55篇においては「あちらこちらをさまよう, 内的な不安」を意味すると解する。現在のヘブライ語テキストを最大限に尊重しようとするわれわれの立場からは, 彼らの見解が支持されるべきである。

05. 4節 b 'āqat: この語は他に用例がなく, その意味も不明確である。Gunkel は 'qt を, 伝道の書9章17節で暴君の「叫び」として用いられている mz'qt の短形とみた。H. P. Müller は, この節前半の「敵の声によって」miqqōl 'ōjēb との並行に注目する。彼は, この語の根が √'jq で, 「人間によって引き起こされる騒音」の意味とする²¹。試訳はこの見解に従った。

06. 4節 c jāmiṭû: 多くの場合, √mwṭ のヒッフィール形と見られているが, 議論がある(Iの当該箇所参照)。Kraus は, 文の構成から考えてこのヒッフィール形動詞がここに用いられることは「不可能」であるという。彼は「彼らが私の上で災い Unheil='wn を操る」と訳す。彼は S. Mowinckel²² に従い, 'wn を「呪いの魔力」の意味にとる。これは認められないが, 彼の √mwṭ に関する理解は首肯できる。Dahood はテキストの修正を行わない。彼は詩篇140篇11節の √mwṭ を「揺れる」ではなく「積み上げる」(heap) と解し, 「彼らは私の上へのしりを積む」と訳す。しかしわれわれは4節と23節 d の双方に mwṭ が用いられていることを考慮すべきである。それらは構造的にも内容的にも対応する(IIの当該箇所参照)。試訳では23節の mwṭ が「よろめく」という意味であることから, これに合わせて4節のヒッフィール形を「(災いを) よろめかさせる」と訳した。これは敵対者が詩人の共同体的, 政治的生命をもて遊び, 邪険に扱うというほどの意味に解せる。

07. 4節 d jīšt'mūnî: 他に創世記に3例(27: 41, 49: 23, 50: 15), ヨブ記に2例(16: 9, 30: 21) 見られる。KBL³はこの語の意味として「敵対する」*anfeinden, befeinden* とともに「敵対する意識にあること」*feinflich gesinnt sein* を挙げている。しか創世記の用例を見ると, この語は必ず具体的に危害を加える行為と並行して記されており, 内的な「敵意」にとどまらない概念をもつといえる。

08. 5節 a jāḥil: √ḥjl のカル形。Lisowsky の Konkordanz によれば, 旧約には28の用例がある。Baumann によれば, この語は古代北西セム系言語においてそれほど多くの用例はな

いが、それらは基本的に \sqrt{jld} と結びついており、アッカド語の場合、「陣痛」という意味が支配的であるとのことである。そこで、この語を出産する人の叫びやうめきに関係づけたのが、J. Scharbert や G. Gerleman である。対して Baumann は彼らの見解を否定し、この語を「誕生の痛みと誕生そのものの間に生起する状況全てを包括する表現である」と説明する²³。しかしこの事柄と「叫び」とが排除しあう関係にあるとは思えない。この語の基本概念は「痛み」であり、コンテクストに照らして考察してみると、その意味をさらに次のように分類できる。a) 陣痛に関わる痛み、b) 戦いにおける怪我など肉体的な痛み、c) 威嚇あるいは恐怖と結びついた精神的な痛み。詩篇にはこの語の用例が他に4例あるが、それらは全て恐怖と結びついている²⁴。ここに詩篇におけるこの語の用法の特徴を見ることができると考える。

09. 5節 b $n\dot{a}p^{\prime}l\dot{u}$: Dahood は npl に軍事的色彩がみられるとして、この語を非意図的な「落ちる」ではなく、意図性が明確な「襲う」*assail* と訳す。確かに敵対者の悪意はすでに4節 c-d で提示されており、Dahood の理解は読み込みすぎである。文脈を見ると6節 a-b でも非人格が喚喩的に主語に据えられてはいるが、詩人のレトリカルな技法と解すべきである。

10. 6節 a $jir^{\prime}a\ w\ddot{a}r\ddot{a}^{\prime}ad$: いずれも「恐怖」に関わる同義語で、W. G. E. Watson は二詞一意 *Hendiadyoin* と説明している²⁵。これは、これら二語を受ける動詞 ($\dot{j}ab\ddot{o}$) が単数で記されているため、文法理論にかなうよう施された解釈である。しかしこの主語と動詞間の単複がずれた表現法は12節 b-c にも見られる。これらはあえて文法規則から逸脱させて、ある種の異化効果を狙った意図的な連語法と見るべきである。

11. 7節 a $w\ddot{a}^{\prime}om\ddot{a}r$: $\sqrt{^{\prime}mr}$ の一人称未完了継続形。Gunkel はこの語も、移行による時制等の歪みを軽減させる手法 *Erleichtung des Übergangs* と性格づけ、Kraus もこの見解を継承する。 $w\ddot{a}^{\prime}om\ddot{a}r$ は旧約中に88回見られ、その4分の3は散文テキストに現われる。それらはたいがい目的語も明確で（たとえ省略されている場合でも文脈からそれをうかがうことができる）、通常の未完了継続形の意味合いで、発話行為を導入する語として機能している。しかし他のもの、特に目的語を伴わず多くの場合詩文に現われるもののいくつかは、独言、あるいは内的な対話への導入句と見ることができる。この語を内的発言として「思う」と訳しうるいくつかの用例について検討したい。a) 創世記44章28節：創世記に見られるこの語の8つの用例中²⁶、この条件を備えている唯一のテキスト。この箇所はユダによるヤコブの言葉の引用で、ヤコブは息子ヨセフについて「殺されたのだと思う」と、自身の観測を言い表わしている。しかしこのテキストも、最近 Westermann が「私は……とふれ回った」*ich rief aus* と訳しているように²⁷、彼の内的発言ではなく、公然とした言明で、そのゆえにユダが引用可能であったと考えられる。b) サムエル記上13章12節：このテキストでは王サウルの「私は……と思い $w\ddot{a}^{\prime}om\ddot{a}r$, ……した」という「考え」を、サムエルが「お前は愚かなことをした (skl ニファル形)」(13節) と非難している。したがってこれは、サウルの内的発言というよりも、彼の公的命令と行動への言及ととりうる。この記述は M. Noth が「申命記史家の作業を示す……確実な指標」²⁸ を見いだせないと評しているように、初期の層に属すると思われる。c) ヤハウェを主語とする $w\ddot{a}^{\prime}om\ddot{a}r$ は、内的発言として、彼の強い意志表明の導入が意図されている。(出3:17, エレ3:

7, 19, 詩95:10, ヨブ38:11)。d) イザヤ書24章16節, 詩篇77篇11節, 139篇11節, ヨブ記29章18節, 哀歌3章18節及び詩篇55篇7節は, 内的独言の導入句と見ることができる。われわれの見るところ, wā'ōmar を用いてこのような内的発言を導入する文学的手法が見られだすのは後代のことで, 詩篇55篇の成立の時代を暗示する表現といえよう。

12. 7節 a mī-jitten-lī: 疑問形による希求文。Briggsはこの表現を希求文の「通例の形態」, D. Michelも修辭的な問いもしくは願望の導入 *Einleitung eines Wunsches* と評する²⁹。

13. 8節 b selâ: ヘブライ語詩篇に71回(七十人訳に92回), ハバクク書に3回見られる。しかしその意味と機能については不明確。七十人訳は, ある種の「中断」を意図してのことと思われるが, *διάφασμα* と訳しており, Symmachus や Theodotion はおおむねこれに従っている。しかし Aquila は恒常性を表わす *αε*, 同様に Hieronymus も *semper* と訳しているが, これはタルグムの *l'm'* とも合致する。R. Stiebによれば, Jakob von Edessa はユダヤ教祭儀に関する叙述で, selâ が「永遠」を意味する *nešaḥ* の代用 (Surrogat) として用いられ, かつその不規則な母音は *nešaḥ* からの模写であると指摘している。だが Stieb は, Jakob が述べるユダヤ教の祭儀とは, selâ がその意味を喪失したエルサレム神殿崩壊からはるか後のそれであるとして, 彼の見解を退ける³⁰。それゆえタルグムや Aquila の理解は妥当性を欠く。B. D. Eerdman は, selâ の語根が \sqrt{sl} 「ひざまずく, 祈る」であり, selâ を祈りのためにひざまずくことへの促しとするが, Kraus は彼の見解を取り上げ, selâ をひざまずいて行なわれる祈りであるアラビア語 *ṣalât*, またサマリアの祈りに見られる *kirugu* と呼ばれる「礼」*Verbeugung* に関係づける (S. 22ff.)。しかしこれを受け入れる研究者はほとんどおらず, 多くは語根を \sqrt{sil} 「あげる」とするところから出発している。Stieb は, 「あげる」を語根とする selâ が詩篇において「目をあげる」ことを意味し, 祈りのうちにある読者が指定された節を復唱する記号が selâ であると考えた。R. Gyllenberg も, selâ が聖歌隊や会衆によって歌われる節や, 場合によってはより長い詩句 *Abschnitt* を指すとする³¹。両者は selâ が単なる「休止」であることを越えて, 別のテキスト朗読が導入される記号であるとしたが, 彼らの理解は M. Goulder によってさらに展開させられた。彼は, コラ詩篇や第二ダビデ詩篇の全体がある儀式の中で用いられ, selâ の個所で朗読あるいは演奏が一時中断され, そのテキストに関連する物語が読み上げられたことを, 具体例をあげて論じた³²。Goulder の提案は一貫性はあるものの, 論証不能と言わねばならない。われわれは selâ が神殿祭儀に結びつけられており, 何かのための「中断」を意味する記号であることは首肯できる。しかしそれが強調のための中断か, 段落の切れ目を示すのか, あるいは会衆によって唱和される他のテキスト挿入の記号であるのか, ということについては断定や特定を避け, 「祭儀に生気を与えるための演奏記号」程度の弾力性のある理解にとどめるべきであろう。また何よりもこの記号は, 作品が創作された後, 神殿祭儀用に挿入されたのであろうが, 詩篇の最終編集はより後代のことであり, 現在のわれわれのテキストで selâ は特別な機能を有していないと考える。

14. 9節 a 'aḥiṣā miplāṭ: 古来 *miplāṭ* は 'aḥiṣā の目的語と解されて, 「私に逃亡を急がせよう」と訳されることが多かった (例えば Olshausen)。しかし Baethgen はこの動詞を士師

記20章37節を参照して自動詞, *miplā* を方向の対格ととり、「私は、私の逃れ場へと急ごう」と訳す。この表現について Delekat は、彼の想定する避難所への逃走, W. Beyerlin はもう少し広く他国への亡命や神殿の避難所もしくは祭儀執行中を理由とする保護を想定する³³。この聖所の避難所 (Asyl) というモチーフには Kraus も同調している。しかし K.-M. Beyse は動詞 \sqrt{hws} の神学的用例について、ヤハウエを動作主とする救いの言辞と結びつくことが多いが、他方、内的動揺を映し出すケースが多いことも指摘している。そしてイザヤ書28章16節や詩篇55篇9節などは、実際の逃れ場ではなく、内的不安を特徴づけると見る³⁴。実際, *miplāṭ* は、並行関係にある先行する8節の「荒野」とともに、文脈上10節c以下の「街」の対立概念とみなしうる。この並行法において「荒野」と *miplāṭ lî* が同定されていると見ることもできるが、むしろこれらは具体的な逃亡先というよりも、「街」という現実以外の場を求める「内的不安」の表現と解するべきである。

15. 9節b-10節b *mērûaḥ sô'â missâ'ar. balla' 'dōnāj pallag l'šōnām* : ここでの問題は、9節bをどのように読み、またそれをどの詩行に属させるかということである。Königはこの文を比較級と解し、「私は……風よりも、嵐よりも早く……へ急ごう」と訳す。しかし9節と3節c-4節b, および10節aとbとの音韻的並行から(IIの当該箇所参照)、彼の理解には疑問をもつ。また同じ理由で、*missâ'ar* を10節に挿入する Duhm の提案 (Iの当該箇所参照) にも賛成できない。10節の *balla'* と *pallag* はともに不定詞とも命令形 (Mandelkernによる) とも解せる。まず $\sqrt{bl'}$ から考察したい。この語の基礎概念についてはいくつかの見解がある。J. Barth は、イザヤ書28章7節に用いられた *bl'* が「混乱」を意味する *blil* あるいは *blh* の異形であると主張し³⁵、Delitzsch も、10節bの *plg* が創世記10章25節に見られることを考慮して *bl'* が創世記11章の *blil* を意識したものと見た。確かにこれらの語は *bl* という二語語根の変形という可能性もあるし、これに続く11-12節の「街の腐敗」というモチーフは、バベルの塔の伝説を彷彿とさせる。彼らの提案は多くの研究者に受け入れられた。たとえば Hupfeld はその注解の第二版では10節の *bl'* が民数記16章の影響下にあるとしながら、第三版では創世記11章との関わりを支持する立場に転じている。その後 A. F. Kirkpatrick, Baethgen らは、民数記16章と創世記11章双方との関わりの可能性を指摘した上で後者を支持した。このように Delitzsch の見解は、今世紀前半の主導的な解釈であり、比較的最近の Anderson や関根らの注解でもこの説明が記されている。しかし言うまでもなく、この見解に対する批判は早くからあった。G. R. Driver は Delitzsch の提案を「形態的には可能だが、疑わしい」と評しているし、A. Guillaume も、ヨブ記2章7節の *bl'* を考察し、その意味を \sqrt{nh} III の同義語で「苦しめる」*afflict* と説明している。また J. Schüpphaus はこの語の意味に関して、a) もっとも広く受け入れられている「喰い尽くす」*verschlingen*, b) Driver, Guillaume によって提案された「苦しめる」*peinigen, quälen*, c) Barth によって提案された「混乱」*verwirren* といふ三つの可能性を提示した上で、a) がほとんどの場合に該当し、b), c) は放棄されるべきであるとして、*bl'* と *blil* の関連について疑義を表明している³⁶。彼の見解は確かに妥当なものであり、われわれも a) がこの語の基本的な意味であると考え。そこで Hitzig はこの詩行の前半から後半に

おける動詞の意味内容の後退に疑義を抱いた。すなわち10節 a の「喰い尽くす (滅ぼす)」から10節 b の「舌を裂く」では呪いの内容が緩化し、いわば竜頭蛇尾 Antiklimax となっているのである。この関連から、われわれは10節 a-b の主要願望が bl' 「喰い尽くす」ことにあり、マソラ・テキストを尊重する立場からは plg を不定詞と解するべきである。したがってこの plg は、不誠実な発言者への呪いを意味し、同時に三人称複数形の接尾辞に暗示された敵対者表象を含む bl' の目的語として機能していると考えられる。

16. 11節 a j'sób*buhā: √sbb ポエル形。幾人かの研究者はこのテキストで、三人称複数で書かれたこの動詞の主語について議論している。われわれはその結論を大まかに三つに分類できよう。それは、a) 10節 c-d の ḥms wrjb (LXX, Aquila, Symmachus, de Wette など)、b) 10節 b に暗示された敵 (Olshausen, Delitzsch, Hupfeld など)、c) ḥms wrjb を擬人法的に敵と解する (Beathgen, Kirkpatrick Gunkel, Dahood など) である。筆者には11節 a-b の言表が文学的な二面性を有しているように思われ、二者択一的に他方を排除する意味の決定をする必要はないと考えるので、c) の理解に近い。

17. 11節 c-12節 b …b'qirbā^h …b'qirbā^h …mēr^hḥōbā^h: Dahood は D. N. Freedmann に負いつつ、11節最終の単語に始まる3詩行に次のような並行法を見いだす。

b'qirbā ^h	hawwōt	From its center, pernicious deeds,
b'qirbā ^h	w'lō' jāmiš	From its center, they never leave,
mēr ^h ḥōbā ^h	tōk ūmirmā	From its square, oppression and fraud!

彼は11節 b の 'l-ḥwmtjh が詩行としては短すぎると考え、w'wn w'ml をそれに続けて、「城壁の上には災いとくたびれ」と訳す。彼がしばしば注解で指摘しているように、前置詞 b は 'from' の意味をもち、三行目の前置詞 m とは同義ということになる。さらに彼は、√qrb と √rḥbh も同義語と考える。そこで上に示したような並行法が構成される。彼の詩行組み換えの試みは巧みではあるが、しかしこれによって詩行の意味が決定的に明確となるわけでもなく、この構想を妥当とすることはできない。われわれはマソラ・テキストをそのまま読んだ。特に11節 c-12節 c の音節が ā^h ないし ā で終わっている点には詩人の意図的な脚韻を認めるべきで (II の当該箇所参照)、改変の必要はない。諸家が写字上の誤りと指摘した二つの bqrhbh の問題は、文学的技法を見ることで解決可能となる。すなわち10節で「街」が提示され、11節 a-b では、その街が全体に拡張されるかのように、動詞と「城壁」の接尾辞で二度語られる。この表現法はそのまま次の Bikola (11節 c-12節 a) に受け継がれる。すなわちここでは「その中」bqrhbh という言い方がやはり二度繰り返され、街の中心である具体的な場所「広場」が最終的に提示される。これは詩人の敵対者の活動の場を暗示するものとも考えられ、詩人の関心の所在を端的に表明する方法と解しうる³⁷ (II の当該箇所参照)。

18. 13節 b w'eššā': 諸家はこの文が「短すぎる」という理由で、修正の提案を行なった。詩文において、他動詞に目的語が欠けている場合であっても、必ずしも詩行としての条件が欠落していることにはならない。事実そのような例は希ではないし、文脈からそれらはある程度推定できる。われわれはまずこのテキストの鑑賞を試みるべきである。13節 b, d では詩人の心

情が表明されているが、この二つの詩行を比較してみると、文体の完成度という点では、Duhm や Bathgen の言葉を待つまでもなく、明らかに13節 d の方が整っている。しかしそれが即座に13節 a の書き損じを意味するわけではない。共時的な観点からこれらの文を見ると、13節 b の unvollständig に対して、13節 d の vollständig という二項対立を得ることができ、そこに詩人の心情を読みとることも可能であろう。それは13節 a と同 c の間の動詞時制の移行とも関わる。これは、街の暴虐状況の前に萎縮し、荒野への逃亡をさえ願う詩人が、発言の上で攻撃に転ずるサインである。すなわち13節 b, d の内容はいずれも非現実の事柄である。したがって、'eššā' の意味するところは「受容できなかった」ということであるが、√str 「隠れる」という一見消極的な行為ととれる言葉は、実際のところ逃げも隠れもしなかったという反語であり、詩人の姿勢に能動的な進展を認めることができる（II-06 および注 7 を参照）。

19. 14節 a-b 'nôš k'erkî 'allûpî m'judâi: この節では、「友人」が三種の表現で語られている。まず、'rkj は√'rk を根とするが、この語は Firmage と J. Milgrom によれば、そこから「査定する」abschätzen あるいは einschätzen という意味を派生するところの「披露する」ausbreiten, auslegen ことが原意で、「同じ地平に陳列されること」eine “horizontale Ausbreitung” がイメージされている³⁸。旧約中に名詞形で33の用例があるが、そのうちのいくつかは社会的な階級を意味しているように思われる。たとえば列王記下23章35節には、王エホヤキムがエジプトのファラオ・ネコに上納金を納めるため、国民に税を課すという記事が見られる。その際、エホヤキムは国民('rš)を査定し(√'rk ヒッフィール形)、彼は「それぞれが査定された高さに従って'jš k'rkw」³⁹ 他の民を金銀を支払うように駆り立てた。この個所で、'jš k'rkw は明らかに課税された人物の納税能力を指し示しており、それはこの時代にあってはそのまま当該人物の社会的な地位をも意味したと考えるとよい。この理解は列王記下12章5節にも適用可能である。そこから'nôš k'erkî という表現を、詩人と友人が「同一地平の」社会的階級に属していた、すなわち職や立場を同じくしていたと解することができる。'lwpj は「信頼、慣れ親しむ」ことを意味する√'lp I の派生語として8つの用例を数える⁴⁰。このうち箴言16章28節と17章9節では、この語が「告げ口」を非難する文脈に見られる。このことを逆の面から観察するならば、この語の意味を、秘密を共有しうる関係と解せる。前出語'rj との関連で考えるならば、秘密を分かちあいうる性格の社会的階級の類似ということになるか。われわれはこの理解を、「若い日の友」に言及するエレミヤ書3章4節、箴言2章17節、あるいは人間への信頼ではなく、神への信頼を勧めるミカ書7章5節にも適用することができよう。mjd'j は、√jd' のプアル形分詞。6つの用例中5つは詩文テキストの嘆きの文脈に現れる⁴¹。さらにそのうちから詩篇55篇の用例を除く他の4例では、詩人は自身の病のゆえに友人(mjd'j)が疎遠となってしまったことの悲しみを語っている。これら5つの用例は必ず一人称単数の接尾辞と結びついており、主体と対象との関わりの堅固さが印象づけられる。また散文テキスト唯一の用例は列王記下10章11節に見られる。この記事はいわゆるエヒウ革命を報告しているが、この語(mjd'jw)はアハブ家に属する「主だった者」(gd'lw)と祭司たちと並行して用いられている。これはアハブの「側近」を意味するものと思われ、やはり関係の確かさを指し示している。こ

れに対して√jd'のカル形分詞は、専門的知識の所有者というニュアンスをもっている。すなわちこの用例は単数形で約50、複数形で約30を数えるが、われわれが調べたところ「知り合い」という意味で用いられているのは4例に過ぎない。他方、「特殊技術所持者」に関する用例は数多い⁴²。そこで√jd'プアル形分詞はカル形分詞に比して、主体と客体の強固な精神的つながりの意味がより強いと結論づけられよう。以上をまとめると、14節の三語は敵対者ばかりではなく、詩人自身の人物像をも映し出している。すなわち、彼らは共同体において同じ立場にあり、職務的(k'rk)また人間的(mjd'i)な信頼(lwpi)を分かちあい、それゆえに神の家で歓声のうちをともに歩みえた(15節)。そしてこの意味で、友人を「恐らく祭司か神殿官吏である詩人の同僚」とするDuhmの指摘は(S. 151)、的を得たものと考えられる。

20. 15節c n'hallék b'rageš: 諸家が人称を整えるために修正の提案をする一方, Dahoodはこのような人称の移行を、詩篇にしばしば見られる「呪いの特徴」characteristic of imprecationと性格づける⁴³。彼は詩篇中の例をいくつかあげて、単数から複数、あるいは複数から単数の移行において詩人が呪いを語っていることを指摘する。しかしわれわれのテキストのように、一人称複数から別の人称に移行する例はなく、これは不規則な表現といえる。この部分には資料・編集批判的な分析が加えられる必要がある。またわれわれが「歓声」と訳したb'ragešについても議論がある。KBL³によれば、ragešの基本的な意味は「不安、混乱」である。Ringgrenはこの語の意味について二つの可能性を提示する。それは、a) 詩篇2篇1節による「騒音」、b) 詩篇64篇3節による「親密な関係」である⁴⁴。七十人訳はb)を採用して「和合して」と訳し、Ewald, Kissaneはこれに従っているが、Ringgren, Dahoodはa)を採る。しかしわれわれは彼らの議論を次のように整理することができよう。すなわちDahoodが指摘するように、rgšは上記の詩篇2篇、64篇および55篇においてswdとの並行の中で見られる。われわれは試訳でswdを「良き交わり」と訳したが、この語は「共同体性に関連づけられた概念」⁴⁵である。この語との関連でrgšが用いられる場合a)とb)の意味は必ずしも排除しあう関係にあるとはいえないのではないか。15節の言表は巡礼の情景を想起させるが、そうであるならば、早くからOlshausen, Hitzig, Delitzsch, Baethgenらによって提案されてきた、この語について祭りの群衆をイメージする解釈は正当な位置をもつと考える。しかしこの語を彼らのように「群衆」と訳す必要はない。われわれは「共同体性が確認されうる場におけるにぎわい」をその意味として想定した。

21. 16節a jaššī^omāwet: jaššī^oは√nš'ないし√šw'のヒッピール形と考えられている。KBL³によれば、√nš'は「偽る、欺く」、√šw'は「災いがつく」ことを意味する。七十人訳, Aquila, Symmachus, Hieronimus, ベシタなどの古代訳, de Wette, Ewald, Duhm, Delitzsch, Gunkel, Krausら大半の注解者は後者を支持する。J. F. A. Sawyerはこの語根がnš' IIおよびš'h「荒廃」と類縁関係にあると述べ、この語の意味を一般的な「偽り、悪、誤り」と性格づける。したがって√nš'と√šw'いずれを採用するかによる意味上の大きな差異はないといえる。SawyerはさらにMowinckelが指摘した²²、古代イスラエルにおいて'wnと同じくšw'のもっていた呪術的な意味に論及し、それは証明しがたいと退ける。彼は旧約におけるいくつかの

法文書や説教が、この語を呪術的に解する近在の共同体を念頭においていること、あるいは十戒の第三戒「神の名をみだりに (lšw') 唱えるな」で用いられるこの語が呪術的な意味に解されてきたことを紹介し、それらを否定はしないが、この語の意味がそれに尽きないと述べ、「誤用」という意味を強調する⁴⁶。換言するならば非意図性あるいは偶然性の意味合いが含まれていることであろう。de Wette や Gunkel らの「(死が彼らを) 襲う」überfallen という訳は誤りではないが、意図性のニュアンスが少々強すぎるように感じる。

22. 16節 c kî-rā'ôt bimgûrām : mgwr の意味には議論がある。語根は√gwr である KBL³ はその意味を4種記している。すなわちそれは、I「奇留者として滞在する」、II「攻撃する」、III「畏れる」、IV「掘り抜く」である。この記述に従うと、われわれのテキストにおけるこの語の意味は「穀物庫、貯蔵用の穴」で√gwr IVの派生語とある。しかし mgwr の訳語について七十人訳以来もっとも一般的であったのは、Iの意味を採った「住まい」(de Wette, Olshausen, Baethgen など)、「納屋」(Ewslid, Hupfeld)、「居留地」(König, Briggs) など、「住居」に関わるものである。Gunkel と Herkenne はIIの意味を採っている。D. Kellermann は、上記の語根がそれぞれ独立したのではなく、本来相互に関連した起源をもつとして、基本概念としてアッカド語の gerû「敵対する」を提示する⁴⁷。試訳ではこの原意を生かした。そのほか Dahood は22節 d で√pṭh の形容詞あるいは受動分詞である。p'tiḥôt が一語で「抜き身の剣」を意味することを例に、同じ形容詞の rā'ôt がここで「有毒な言葉」を示唆すると主張する。さらに彼は上述したように前置詞 b が英語の 'from' を意味すると述べ、また mgr を「喉」を意味する gārōn と関連づけて、全文を「有毒な言葉が彼らの喉と胸から進みくると」訳す。しかし彼の rā'ôt 解釈は読み込みに過ぎず、受け入れがたい。

23. 18節 a 'ereb wābōqer w'šoh'ragim :すでに de Wette, Olshausen, Kirkpatrick, Baethgen らによって、この表現はダニエル書6章10節に言及されている捕囚後ユダヤ教における一日三度の祈りの時間と解されてきた。これに対して Anderson, Niehr⁴⁸ らは、これを一日の包括的な表現とする。しかし明らかに「一日の包括的な表現」である11節 a の「昼も夜も」jôm wālalā との違いを考慮すると、この言い方が祈りの時間を示唆するとの想定はあながち無理ともいえない。編集の問題とからめて考察されるべきであると考えられる。

24. 19節 b miqq'rob-lî: この語は、I-20で示した通り、「近接」と「戦い」双方の意味をもちうる。しかし加えてわれわれはこの語根 qrb が、II-05に示したように、他に5節 a, 11節 c, 12節 a, 16節 e そして22節に見られることを考慮すべきである。この語根は詩人の生活領域や彼が巻き込まれた現実を語る文脈で用いられている。そのゆえに議論を読んだ19節における qrb の変則的な用法は、これらのテキストとの間に結束性を生じさせるためのものとして、すなわち詩人の苦闘する生活空間を共示する性格を包含するものとして解されるべきであると考えられる。

25. 19節 c b'rabîm: ここで注目されるべきは、Olshausen も簡単にはあるが指摘している b'rabîm の位置である。彼はこれを「通常のものではないが、非難されるべきものでもない」(S. 238) と歯切れの悪い表現で評している。われわれはここで関根氏が紹介するような「主要

語を前に置く構文」dominierende Vorstellungを想起すべきであろう⁴⁹。詩人にとって敵対者が多数であることは、その窮状を訴える上で不可欠の情報であった。加えて18節c-19節aと19節b-cとの間の音韻的並行法も見過ごせない(Ⅱの当該箇所参照)。詩人は各詩行の終結部に同じ母音îを置き、二つの行を関係づけようとしている。ここから読者は、詩人の経験した神の救済が、具体的には敵対者からの解放であったとの印象を与えられる。この並行法の設定が、「通常のものではない」b'rabîmが用いられた理由と考えられる。

26. 19節c 'immādî:これは√'mdの派生語で、S. Amslerは前置詞'mに接尾辞がついた形態よりも強い意味の語と説明している⁵⁰。'm以上に当事者間の精神的な距離が近いということを示唆する語ということであろうか。45の用例があるこの「共在」を示す語が「抗する」という意味に解されるケースはさほど多くはない。KBL³はこの語の意味を1) bei, 2) neben mirとともに3) feindlich gegen michと記し、3)の例として、詩篇55篇19節とヨブ記6章4節をあげる。しかし後者のテキストḥiṣê šaddaj 'immādîはパラフレーズすれば「全能者の矢が私にささる」⁵¹であるかもしれないが、直訳すると「全能者の矢が私とともにある」であり、この箇所における'immādîが必ずしも上述した3)の意味で用いられているとはいえない。次にGunkelの指摘では、ヨブ記10章17節における'immādîが3)に該当する。しかし筆者の読むところ、このテキストw'tereb ka'aškā 'immādîは「あなた(=神)は私に向かって、あなたの怒りを増し」⁵²と訳されることが多いが、'immādîは前句の「怒り」k'sにかかっている。そうであればこの文は「あなたは私のもとにあるあなたの怒りを増し加える」と訳されるべきであると考えられる。無論、例えばヨブ記13章19節、23章6節、31章13節のように、√rjb「言い争う」の目的語を受ける前置詞という限定された範囲においてはああるが、'immādîが「抗する」という意味を含んでいるケースは明らかにある。いま試みた読みも、それぞれの文脈で'immādîが「抗する」という対立的な意味をもつことを退けるものではとりあえずないが、しかしこの語を単なる距離の近さという意味で読んでも、その文脈は理解可能だということである。さらにわれわれのテキストで'immādîは√hjhに伴われているが、この用例(創28:20, 31:5, 35:3, ヨブ29:5)は必ず「神は私と共にいる」という告白の文脈で用いられている。このこともわれわれの文脈における'immādîの基本概念を考察する上で、重要な位置をもつであろう。Königもこの前置詞が「抗する」という意味をもたないと述べ、19節a「の平安のうちに……贖った」との関連から、「(最終的に)彼らが私の傍らにいた」と和解の場面をイメージする。しかし読み込みすぎとの感を禁じ得ない。この点でHitzigの「大人数で彼らが私を囲む」という訳は、原文に忠実であるといえる。われわれは試訳においていま仮説的に提示した理解からテキストを読んだ。この文面からは、大勢の敵対者と詩人の物理的ばかりでなく精神的な距離がそれほど離れていないという状況が浮かび上がってくる。加えて、19節bもこの文脈から理解されるべきである。

27. 20節a jišma' 'el w'ja'nēm: Dahoodはw'ja'nēm最後のmが前接語であると解し、wajja'anmと読んで、三人称複数の接尾辞を無視する。彼はこの文の目的語が前節最終の'immādîであるとして、「エルは私に聞き、応えた」と、√'nhの目的語も詩人と見る。一方、

König はこれを反語的な「応える」と解する。しかし次のことに目が向けられるべきである。すなわち17節に始まる神による救済の言表に敵対者への言及は一切見られず、19節後半から初めて敵対批判が導入される。そして20節 a にそれが引き継がれている。この文脈を考慮し、v'nh の三人称複数の接尾辞を尊重して、マソラ・テキストをそのまま読むよう努めるべきである。加えてこの動詞は3節でも使用されている。意味上、3節のそれは明らかにv'nh I 「応える」、20節のそれは同II 「苦しめる」と異なるが、試訳ではここに同音異議語が用いられていることを意識した。

28. 20節 b w'jōšēb qedem: 上述したように、wjšb の接続詞 w が解釈上の大きな妨げとなっている。われわれはこの w をいわゆる Waw apodosis と考える⁵³。たとえばヨブ記4章6節には、tiqwāt'kā w'tōm d'rākejkā 「おまえの道の全きさこそが、お前の希望（ではないのか）」という文がある。この第二語における接続詞 w の位置が不可解であるとし、七十人訳やペシタを参照して wtiqwāt'kā と移動させる提案があるが、そのような変更の必要は認められない。これは主語を強調する Waw apodosis の例と解されるべきである。またエレミヤ書6章19節の 'al-d'bāraj lō' hiqšībū w'tōrātī wajjim'sū-bā' 「私の言葉に彼らは注意を向けず、そして私の律法を、彼らが捨てたからだ」も同様に考えられる。通常のヘブライ語散文であるならば、wajjim'sū b'tōrātī とでもするところであろうが、ここではまず trwtj が倒置され、さらに v'm's に Waw apodosis として接続詞 w が加えられているのである。詩篇55篇20節 a-b の場合、全体として A-B: A'-B' の構造が想定される。すなわちこの二詩行では、神を動作主とする動詞と主語が二回重ねられている。そして20節 b では神による敵対者に対する処罰の願いが語られているが、詩人はこの詩行を前行よりも一歩踏み込んだ願いとして Waw apodosis を用いて強調していると考えることができる。

29. 20節 c 'šr: どの語が関係詞 'šr 以下の先行詞となるかが議論されている。Dahood は wjšb qdm を先行詞と考え、「変わることはない、いにしえより座する者」と訳し、M. E. Tate はこれらになっている。しかしすでにこのような読み方を König や Wutz が批判しているし、何よりも20節 c-d が一つの Bikola であることを念頭に置くと、そこに異なる主語を設定することには無理がある。われわれは多くの注解者とともに、20節 a の w'ja'nēm の接尾辞に三人称複数で暗示された敵対者を先行詞と考えた。

30. 20節 c 'šr...h'lipōt: Gunkel はアラビア語における同根語の用例からこの語を「誓い」と訳す。しかしこの訳語は他のヘブライ語テキストに適用できず、したがって採用することはできない。多くはこの語を「変化」という意味に解している。この「変化」という意味を発展させたものと思われるが、このヒッフィール形自動詞には、「(力を)新しくされる」という意味が見られる(ヨブ14:7, 29:20, イザ40:31)。ここから本テキストにおける h'lipōt にも、Deissler の「回心」Sinnesänderung という理解に近く、宗教的な「新しさ」というニュアンスを読み込むことができると考える。

31. 21節 a bišlōmājw: この語の意味は詩篇41篇10節の 'jś šlwn と同じく、平安を与える人(友人)を指す。このテキストには単複を巡る議論がある(Iの当該箇所参照)。しかしわれわれ

れの見るところ、この詩行には末尾部分に22節 a-b との音的並行法が認められる。(Ⅱの当該箇所参照)。それゆえわれわれは改変の必要はないと考え、ここをマソラ・テキストに従って訳し、敵対者が複数の「同志」に「手を伸ばした」という言表と解した。

32. 22節 d p'tihôt:七十人訳がこの訳語に「兵器」を意味する *βολίδες* をあてて以来、伝統的に *√pth* I の派生語として「抜かれた剣」と訳されてきた。Dahood は注解の1968年版ではこの理解に準じているが、1979年版では、これを *√pth* II 「彫り込む」の派生語と解し、「研ぎすまされた剣」と訳す。この理解の方が22節 a の「柔らかい」というイメージとの間の二項対立が明確となり、原文のニュアンスをより生かせると思われる。

33. 23節 a j'hobkā:旧約中唯一の用例。jhb はアラム語で「与える」を意味する。この語については多くの議論がある。七十人訳は *μέριμναν* (不安), Aqiula, Symmachus は *αγαπήσει* *σε* (jhb=彼が君を愛する), Talmud, Midrasch は「重荷」と訳している。Duhm もこの語が元来アラム語であり、タルグムの詩篇11篇6節で「運命」の意で用いられていることを指摘する。しかし Olshausen はこれらの説明が語源的に基礎づけられたものではなく、解釈の違いはそのまま理解の正確さを表わしているにすぎないと述べる。特に Aquila, Symmachus の訳は問題にならない。de Wette はこの語が「授けられたもの」*das Gegebene, Beschiedene* を意味すると考え、Geschick「運命、才能」と訳す。Dahood も同じく、アラム語の jhb からその意味を派生させている。われわれは彼らの理解に従った。

34. 24節 b lib'er šaḥat:七十人訳は *√šht* 「滅びる」との関連から「滅びの泉」と訳す。この理解を Olshausen は支持するが、Hitzig は強硬に否定し、šaḥat が *šûḥâ* (*√šwh* 「下る」。用例は箴2:18のみ)に関わる「穴」を意味すると述べる。したがってこの句は同義語の結合ということになる。de Wette は詩篇40篇3節にも見られるこの種の結合が強調のための技法であると述べる。他方、Gunkel はこれが直接「冥界」*Unterwelt* を表わすと主張する。彼の見解は KBL³にも援用されているが、意味論上、七十人訳の理解に近いといえ、また旧約における šaḥat の用例も、文字通りの「穴」としてというよりも、明らかに「滅び」や「死」という意味で用いられるケースが多い⁵⁴。試訳ではこのニュアンスを生かした。

35. 24節 c 'anšê dāmîm ûmirmâ: Dahood はこの詩行を「偶像と彫像(を拝む)人々」と訳し、この作品の異教的土壌を指摘する。彼によれば dāmîm は dm ではなく dmh 「類似する」の派生語で、「類似」*simulacrum* や「偶像」の意味をもつ。また mirmâ は詩篇24篇4節とヨブ記31章5節で šw' 「無価値」と並行して用いられており、さらにエレミヤ書5章27節、9章5節では「偶像」の意味にとれると言う。そこで彼は上記の訳を提示した。しかし šw' を「偶像」の意に用いる例はないし、エレミヤ書のテキストを「偶像」と解するのは無理がある。

36. 24節 d jeh'sû: H. Wildberger は *√hsh* の基本概念を「分割する」と規定する⁵⁵。ここから「半分を得る」という意味を取り、七十人訳以来の「(人生の)半分を得られない=半ばに達しえない」という訳が定着した。しかし悪人が自身の生を他者と「分かち合わない」と解することも可能であると考え。試訳ではⅡ-12に示した並行法から、伝統的な訳に従った。

IV. 試訳* : 詩篇55篇

1. 指導者に。琴（の伴奏）に（よる）。ダビデに（献呈）。マスキール。
- 2 a. 耳を傾けてください、神よ、私の祈りに。
 - b. 憐れみを願う私の思いから、身を隠さないでください。
- 3 a. 私に注意を向け、私にお応えください。
 - b. 私は眩きつつ、彷徨し、
 - c+4a. 思い乱れています、敵の声によって、
 - 4 b. 悪人の叫びの前で。
 - c. 彼らは、私の上に、災いをよろめかせ、
 - d. そして彼らは怒りをもって、私に危害を加えるからです。
- 5 a. わが心は、私のうちにうずき、
 - b. 死の恐怖が、私の上に落ちてきました。
- 6 a. 恐れとおののきが、私のもとにきたり、
 - b. 震えが、私を、覆いました。
- 7 a. 私は言った。誰か私に出来ないものか、鳩のような翼を。
 - b. 私は飛んで行って、休もう。
- 8 a. 見よ、私は遠く離れてさすらい、
 - b. 荒野で夜をすごそう。セラ
- 9 a. 私は急ごう、私の逃げ場へと、
 - b. 吹き払う風の前から、嵐の前から。
- 10 a. 食いつくしてください、主よ、
 - b. 彼らの舌を、二つに裂いて。
 - c. 私は見たからです、暴虐を、
 - d. 争いを、街に。
- 11 a. 昼も夜も、彼らはその周りを巡る、
 - b. その城壁を。
 - c. 災いとくたびれが、その中に。
- 12 a. 腐敗が、その中に。
 - b. その広場から離れない、
 - c. 虐げと欺きは。
- 13 a. なぜならば、敵が私を愚弄したのではないからだ。
 - b. （そうであれば）私は胸を張っただろう。
 - c. 私の憎む者が、私に高ぶったのでもなかった。
 - d. （そうであれば）私は彼から身を隠したであろうに。

- 14a. おまえなのだ。私と同じ立場の者、
 b. 私が信頼した者、私が心を許した者。
- 15a. われわれはともに良き交わりをもち、
 b. 神の家で、
 c. われわれは練り歩いたものだ、歓声のうちを。
- 16a. 死が彼らを誤襲しますように。
 b. 彼らが生きてまま陰府へ下りますように。
 c. なぜならば、悪こそが、彼らの中にある、彼らの障地だからです。
- 17a. 私は神に呼ばれる。
 b. そしてヤハウェが、私を救う。
- 18a. 夕に、朝に、そして昼に、
 b. 私は、眩き、思い乱れる。
 c. 彼は、私の声を、聞いた。
- 19a. 彼は贖った、私の魂を、平安のうちに、
 b. 私を抱き込む者がないように、
 c. なぜならば、大人数で、彼らが私の傍らにいたからです。
- 20a. 神が聞き、
 b. そして彼らに応じますように、あのいにしえより座する者が。セラ
 c. それは、決して新たにされることのない者たち、
 d. 神を、畏れない者たち。
- 21a. 彼はその手を、その平安なる者〔同志〕たちに伸ばした。
 b. 彼はその契約を冒瀆した。
- 22a. その口から溢れるバターは滑らか、
 b. しかしその心は戦い。
 c. その言葉は、油よりも柔らか、
 d. しかしそれらは研ぎすまされている。
- 23a. 委ねよ、ヤハウェに、君の賜物を。
 b. 彼こそが、君を引き受ける。
 c. 彼は永遠に〔絶対に〕ゆるさない、
 d. 義人に、よろめきを。
- 24a. あなたこそが、神よ、彼らを下らせます、
 b. 滅びの穴へと。
 c. 血と欺きの人々が、
 d. その日々〔生涯〕の半ばに達することなどない。
 e. 私はあなたに、信頼します。

※（ ）は訳出の都合上補った原文にはない語、〔 〕は遂語訳を補うための意識を示す。

参照注解書

- A. A. Anderson, The Book of Psalms I. Psalms 1–72 (NCB), 1972.
F. Baethgen, Die Psalmen (HK 2/2), 1897 (1904).
C. A. & E. G. Briggs, A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms II (ICC 16/2) 1907.
M. Dahood, Psalms II. 51–100 (AB 17), 1968(1979).
A. Deissler, Die Psalmen, 1989⁴.
F. Delitzsch, Biblischer Kommentar über die Psalmen (BKAT IV/1), 1867.
B. Duhm, Die Psalmen (KHC 14), 1899.
A. B. Ehrlich, Die Psalmen, 1905.
H. Ewald, Die Dichter des Alten Bundes. I/2, 1866⁵.
E. S. Gerstenberger, Psalms I, With an Introduction to Cultic Poetry (FOTL XIV), 1988.
H. Gunkel, Die Psalmen (HK 2/2), 1929⁴(1986⁶).
H. Herkenne, Das Buch der Psalmen (HSAT 5/2), 1936.
F. Hitzig, Die Psalmen, 1863.
H. Hupfeld, Die Psalmen III, 2. Auflage bearbeitet von E. Riehm, 1870.
—, Die Psalmen II, 3. Auflage bearbeitet von W. Nowack, 1888.
A. F. Kirkpatrick, The Book of Psalms I, 1902.
E. J. Kissane, The Book of Psalms, 1964.
R. Kittel, Die Psalmen (KAT 13), 1922⁴.
E. König, Die Psalmen, 1927.
H. –J. Kraus, Psalmen I, Psalmen 1–59 (BK XV/1) 1978⁵.
J. Olshausen, Die Psalmen (KHAT 14), 1853.
H. Schmidt, Die Psalmen (HAT 1/15), 1934.
関根正雄, 『詩篇注解(中)』(関根正雄著作集第11巻) 1980年。
M. E. Tate, Psalms 51–100 (Word Biblical Commentary 20), 1990.
A. ヴァイザー(塩谷沢), 『詩篇42–89篇』(ATD旧約聖書注解13) 1985年。
W. M. L. de Wette, Commentar über die Psalmen, 1836.
F. Wutz, Die Psalmen, 1925.

注

1. G. Vanoni, Psalm 22. Literarkritik, in; J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (fzb 60), 1988, S. 153–192. 彼はすでに列王記上11–12章のテキストを研究したその学位論文においても、ほぼ同様の手順で分析を行なっている。Vgl. ders., *Literarkritik und Grammatik. Untersuchung der Wiederholungen und Spannungen in 1 Kön 11–12* (Arbeiten zu Text und Sprache im Alten Testament 21), 1984.
2. Dahood, *Philological Observations on Five Biblical Texts*, Bib 63 (1982) pp. 390–394, bes. pp. 391f.
3. A. Baumann, Art. “hnh”, ThWAT II, Sp. 444–494.
4. Dahood, *A Sea of Troubles: Notes on Psalms 55:3–4 and 140:10–11*, CBQ 41 (1979), pp. 604–607. bes. pp. 604f.
5. Ehrlich, *Handglossen zur Hebräischen Bibel* 6, 1913 (1968) S. 4.
6. Dahood, a. a. O., pp. 604f.
7. 拙論「深き淵と錯綜する神名」『神戸女学院大学論集』(=『論集』)37/1(1990), 118頁以下, および注8を参照。

8. H. Ringgren, *Psalmen*, 1971, S. 128 Anm. 12.
9. 関根正雄,『旧約聖書文学史上』岩波全書, 1978年, 20頁。その他, 拙論「旧約詩文テキストの構造分析」『論集』34/1(1987)の注20を参照。嘆きの文脈に見られる長母音iの連続は, 第一, 第二ダビデ詩篇では5^{2-3b}, 17^{1c-d}, 42^{6a}(12, 43⁵), 54^{3-5a}, 64², 68⁷, 70⁶があげられる。しかし3篇を見ると, 2節b-3節aでは長母音iの連続が明らかに嘆きと結びつくが, 4節bのiの連続は告白を語っている。同様のことが56篇3節b(嘆き)と10節c(告白)にもあてはまる。
10. エレ17¹¹, 詩102²⁵, 109⁹, ヨブ22¹⁶, 箴10²⁷に類似の表現が見られる。
11. 拙論「詩篇55篇の文芸学的・社会史的考察」『基督教研究』53/1(1991), 86頁および注1)を参照。
12. Vgl. P. Casetti, *Gibt es ein Leben vor dem Tod? Eine Auslegung von Psalm 49* (OBO 44), 1982, S. 39; Kraus, S. 25; N. Füglistler, Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende, in: J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (fzb 60), 1988, S. 319-384, bes. S. 375ff., M. E. Tate, 4f. 勝村弘也,『詩篇注解』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ), 日本キリスト教団出版局 1992年, XV。
13. G. W. Anderson, Art. "nsh", ThWAT V, Sp. 565-570.
14. いずれもピエール形で, エズ3^{8,9}=神殿工事の指導, 歴代上15²¹=歌を導く, 同23⁴=神殿の務めの指導, 歴代下2^{1,17}, 34¹²=荷役の監督, を意味する。
15. L. Delekat, Problem der Psalmenüberschriften, ZAW 76 (1964), S. 280-297, bes. S. 283ff.; Füglistler, a. a. O., (=Anm. 12), S. 376f.
16. K. Koenen, Maškil —>Wechselgesang<. Eine neue Deutung zu einem Begriff der Psalmenüberschriften ZAW 103 (1991) S. 109-112.
17. Vgl. Kittel, a. a. O., S. LVIII; Kraus, a. a. O., S. 19f.; S. Mowinckel, *Psalmenstudien* IV, S. 5-7; ders., *The Psalms in Israelite Worship* II, 1962. p. 209.
18. König S. 39; R. P. Carroll, Psalm LXXVIII, VT 21 (1971) S. 133-150, bes. 133f., 他。
19. Delekat, a. a. O. (=Anm. 14), S. 282.
20. K. Seybold, Psalm 104 im Spiegel seiner Unterschrift, ThZ 40 (1984), S. 1-11, bes. S. 7f.
21. H. P. Müller, Die Wurzel 'jp, j'q und 'wq, VT 21 (1971) S. 556-564, bes. S. 558f.
22. S. Mowinckel, *Psalmenstudien* I, 1921, S. 29ff.
23. J. Scharbert, Der Schmerz im AT, BBB 8, 1955, S. 21-26; G. Gerleman, *Esther* (BK XXI), 1973, S. 105; Baumann, Art, "hjl" ThWAT II, Sp. 898-902.
24. 他に詩77¹⁷, 96⁹, 97⁴, 114⁷.
25. W. G. E. Watson, *Classical Hebrew Poetry. A Guide to its Techniques* (JSOTS 26), 1986². p. 325.
26. 他に創20¹³, 24^{39, 42, 45, 47}, 31¹¹, 41²⁴.
27. C. Westermann, *Genesis* (BK I/3), 1982, S. 141.
28. M. ノート(山我訳)『旧約聖書の歴史文学——伝承史的研究』日本キリスト教団出版局1988年(原著1943年), 135頁。
29. D. Michel, *Tempora und Satzstellung in den Psalmen*, 1960, S. 203. さらに B. Joneling, L'expression my ytn dans l'ancien testament, VT 24 (1974), S. 32-40; C. Brockelmann, *Hebräische Syntax*, 1956, 89を参照せよ。
30. R. Stieb, Die Versdoubletten des Psalters, ZAW 57 (1939), S. 102-110, 102ff.
31. R. Gyllenberg, Die Bedeutung des Wortes sela, ZAW 58 (1940), S. 153ff.
32. M. Goulder, *The Psalms of the Sons of Korah* (JSOTS 20) 1982, pp. 102ff.; ders., *The Prayers of David (Psalms 51-72). Studies in the Psalter* II (JSOTS 102), 1990, pp. 74ff.
33. Delekat. *Asylie und Schutzorakel am Zionheiligtum. Eine Untersuchung zu den privaten Feindpsalmen*, 1967: W. Beyerlin, *Die Rettung der Bedrängten in den Feindpsalmen der Einzelnen auf institutionelle Zusammenhänge untersucht*, 1970, S. 24f.
34. K.-M. Beyse, Art. "hûš", ThWAT II, Sp. 820-822.

35. J. Barth, *Beiträge zur Erklärung des Jesaja*, 1885, S. 4f.
36. Vgl. G. R. Driver, *Hebrew Note*, ZAW 52 (1934) S. 51–56, bes S. 52; A. Guillaume, *A Note on √bl'*, JThS 13 (1962) S. 320–322; J. Schüpphaus, Art. “bl”, ThWAT I Sp. 658–661.
37. 例えば創世記1章の天地創造物語に同様の構造がみられる。この物語では、神の業の舞台が「宇宙、天空、海陸」の順で二度繰り返されている(第1. 2. 3日目と第4. 5. 6日目)。この構造は大きな枠から出発して最終的に神が愛を注ぐ対象(地、人間)がズーム・アップされてゆく、作者の関心の場を示す技法と理解できる。逆に詩篇84篇では、神殿から前庭、巡礼の道と舞台が拡張されてゆき、神殿信仰が隠喩化されるプロセスが写し出されている。拙論「詩篇84篇の文学的構造と主題」『論集』33/1 (1986)を参照。
38. Firmage/Milgrom, Art. “rk”, ThWAT IV, Sp. 380–384, Sp. 381.
39. E. Würthwein, *Die Bücher der Könige. I. Kön. 17–2. Kön. 25*, 1984, S. 466の当該個所の訳“Je nach den, wie hoch jemand eingeschätzt wurde”を援用した。
40. エレ³, 11¹⁹, 13²¹, ミカ⁷, 箴²⁷, 16²⁸, 17⁹。
41. 王下10¹¹, 詩31¹², 89^{8, 19}, ヨブ19¹⁴, および詩55¹⁴。BHSで読み換えの提案がなされているイザ12⁵を除く。
42. カル形における「知り合い」の用例：サム上10¹¹, ヨブ19¹³, 42¹¹, 詩87⁴。
同じく「特殊技術所持者」に関する用例：創25²⁷, サム上16^{16, 18}, 王下9²⁷, イザ29¹¹, アモ5¹⁶, 詩74⁹, ヨブ43², エス1¹⁷, 代下2^{6, 7, 12, 13}, 8¹⁸など。
43. Dahood, S. 34, およびders, *Psalms I*, pp. 34f. 134を参照。
44. Ringgren, a, a, O., S. 42およびS. 129 Anm. 15を参照。
45. I. Willi-Plein, *Das Geheimnis der Apokalypik*, VT 27 (1977) S. 62–81, S. 70.
46. J. F. A. Sawyer, Art. “šāw”. THAT II, Sp. 882–884, およびMowinckel, a, a, O., S. 51–57.
47. D. Kellermann, Art. “gwr”, ThWAT I, Sp. 979–991.
48. H. Niehr, Art. “šoh^orajim”, Th WAT VI, Sp. 924–926.
49. 関根正雄「古代ヘブライ詩文の『きれ』」『聖書ヘブライ語』5(1986), 137–152頁。
50. S. Amsler, Art. “md”, ThWAT II, Sp. 328–332.
51. F. Horst, *Hiob 1–19* (BK XVI/1), 1968, S. 92による。
52. Vgl. a. a. O., S. 139.
53. G. -K., §143dを参照。さらに注49の関根論文との関連も考慮されるべきである。
54. 23の用例中, イザ38¹⁷, 51¹⁴, エゼ28⁸, ヨナ2⁷, 詩16⁹, 30¹⁰, 49¹⁰, 55²⁴, 94¹³, 103⁴, ヨブ9³¹, 17¹⁴, 33^{18, 22, 24, 28, 30}の17例は, 並行法や文脈から「滅び」「死」の意味を内包すると判断される。他の6例は, エゼ19^{4, 8}, 詩7¹⁶, 9⁶, 35⁷, 箴26²⁷で, 「わな」の比喩としての「穴」の意に解しうる。
55. H. Wildberger, *Jesaja 25–39* (BK X/3), 1982, S. 1208.

(原稿受理 1992年4月14日)